

〔創作〕

内野一人百首(Ⅱ)

清水 汎

(二六)

つかひはも仕へまつる靈 嗣業者に
つかふるべしとつかはされたり

戦後の日々の唯一の娯楽として百人一首をそらんじたのは五十年も昔のこと、その五十年の彼方から、初句の五音が今もなお、百首を百首とも呼び出してくれる。たとえば、「たちわかれ いなばのやまの みねにおふる まつとしきかば いまかへりこむ」の傍点の音と意味との見事な連鎖が示すように。

旧約聖書も音と意味との押韻によって、記憶を容易にする。章中に聖書最多の節を有する詩篇百十九篇がその好例であろう。ヘブル語のアルファベットは二十二文字、たとえばア・レ・フ・Aを頭にもつ単語に始まる文を八つ連ねて一連とする。二十二の八倍で百七十六節となる。こ

れは勿論、ヘブルの児等の記憶を助けるための工夫に他ならない。

この同工異曲（手際は同じだが趣は異なる）を新約聖書に探していた私に「御使はみな／事へまつる靈にして救を／嗣がんとする者のために／職を執るべく／遣されたる者にあらずや」とヘブル書一章十四節が与えられた。各行ツ音に始まり、使・事・嗣・職・遣とみな同語源である。聖句暗誦の助けとなる短歌もがなと、一首にまててみた。

たちわかれいなばの山の峰に生ふる
まつとしきかばいま帰りこむ

中納言行平

(二七)

アモン討ついくさの春のひと夜ゆゑ
つるぎは永久に離れざるべし

ヨアブを将とするダビデ軍は、腹背に敵を受けたが勝利して、アラム・アモン同盟を崩した。その翌年、麦の刈入れがすんだ五月「春になって」(口語訳)再びダビデ軍は出陣し、ラバの城にアモン軍を囲んだ。ダビデは軍をヨアブに任せ、オフエルの丘の宮殿の屋上に出た。美しくからだを洗うバテ・シェバをダビデは寝所に召し入れた。この「いくさの春のひと夜ゆゑ」(サムエル後書一章)に、王家の悲劇が始まるのである。

「恋ひわたるべき」のべしは、物事の状態を「必然・当然の理として納得する外はない」(岩波・古語辞典)と否定を許さない判断を下す際に用いる助動詞である。歌の意は、春をひさぐ難波の遊女ですら、一夜の仮寝は長く「恋ひわたるべし」と、心にきざみつけられる、となる。夫が戦場にあるときの一夜の仮寝はバテ・シェバにかななる傷を与えたのだろうか。聖書は百人一首のように女性は女性の心理に立ち入らない。しかし、ナタンの預言「剣何時までも汝の家を離る、ことなかるべし」と、王家

の乱れは長く続き、「アブシャロム。わが子よ」(サムエル後書一八章)の悲痛の叫びに到るのである。

難波江の芦のかり寝のひと夜ゆゑ

みをつくしてや恋ひわたるべき

皇嘉門院別当

(二八)

人の眼のしづくをぬぐふ神なれば

流し得たまふ涙なりけり

涙は日本の詩歌最大のテーマのひとつであろう。道因はその涙を少しく滑稽に扱い、死ぬほど好きなのに死なない、そのくせ涙は止まらなさと歌う。「である」と指定する助動詞のなり、「そういう事態なんだと気がついた」(岩波・古語辞典)と回想し詠嘆する助動詞のけり、その二つをなりけりと重ねて駄目押しするところに、おかしさがあるとされている。

聖書語句辞典で涙を調べているうちに、なりけりが、おかしさを含ませた軽い詠嘆から、言うなれば、重い詠嘆に変わっていくのをおぼえた。聖書が語られ記され読

まれてきた幾千年の過去から「そういう事態だったのだと気がついた」時の、深い驚きをこめた詠嘆の助動詞となった。

ヨブをはじめとして、人間は「涙のパン」を食べ「涙の谷」を通ってきた。しかし神は、人の流す涙を見（イザヤ書三八・五）、その涙をことごとく拭って（イザヤ書二五・八）くださる神なればこそ、夜も昼もたえず涙を流して（エレミヤ記一四・一七）まで、民のことを思われるのだと気が付いた。神にしてはじめて流し得る涙、聖書の神は擬人化の神ではなかった。

思ひわびさても命はあるものを
憂きにたへぬは涙なりけり

道因法師

（二九）

ユダの野に夏来にけらし西風の
打ち場に麦を篩へとぞ吹く

行く春を惜しみ来る夏を待つ心は日本の詩歌の伝統だが、この小倉百人一首は立夏（五月六日頃）を歌った典

型とされ、「白妙の衣ほすてふ」は夏の序詞とまで考えられている。心も軽い「けらし」の音が「てふ」とひびきあい、丁丁発止（ちょうちょうはっし）、歌全体をうきたせている。

聖書の夏の風物は「葉芽ぐめば夏の近きを知る」（マタイ二四・三二）や「夏の時に雪ふり」（箴言二六・一）のように、たとえに用いられているのが大半だが、心はずむ夏もある。「收穫の時は過ぎ夏もはや^{おほ}畢りぬ」（エレミヤ八・二〇）とあるように、夏は刈り入れ時である。大麦は五月、小麦はそれよりひと月あと、と言う。ユダや暦なら三月のシワン、太陽暦の五月から六月にかけてである。日本流に言えば立夏から芒種（ぼうしゅ・六月五日頃・芒はのぎ、種はたねで麦の刈り稲を植える節季のこと）にかけての頃である。

ユダの野でもこの頃、麦の刈り入れの最後の仕事である篩い分けが始まる。当時“大海”とよばれていた地中海から、六月の西風が吹いてくる。

春すぎて夏来にけらし白妙の
ころもほすてふ天のかぐ山

持統天皇

(三〇)

あらざらむこの身に抱く幼子の
光に魂の安らふとき来

和泉式部は十世紀後半の歌人、夢多く恋激しき女性だった。あらざらむ（死期が近づいた）と達観した後、すぐに、あふこともがな（目でいいから会いたい）と激しく願うこの歌は、遍歴の生涯を辞する歌である。

聖書にも辞世の歌は多い。創世記四九章はエジプトに於けるヤコブ辞世の歌であり、申命記二三章は、ピスガの頂きから約束の地を望みつつ死んだモーセの白鳥の歌である。そして、新約聖書随一の名歌はルカ伝二章、ラテン語の最初の二語 *Nunc Dimittis* をとって、ヌンク・ディミッティス（今こそ逝かしめ給へ）と呼ばれるシメオンの歌であろう。

主よ、今こそ御言に循ひて
僕を安らかに逝かしめ給ふなれ。
わが目は、はや主の救を見たり。
是もろもろの民の前に備へ給ひし者、
異邦人を照らす光、

御民イスラエルの栄光なり。

レンブラントが逝く年に手がけた未完の作品はヌンク・ディミッティスであったと言う。降誕祭の教会で、一九九四年八月四日桑港に生まれた第六孫、ロバート直樹をこの身に抱く時のわが白鳥の歌もかくあれと願う。

あらざらむこの世のほかの思出に
いまひとたびのあふこともがな

和泉式部

(三一)

花のいろはうつりにけりなもろもの
島にてはまれ語りつげよと

「花のいろはうつりにけりな」は古今東西宗教を問わぬ人間の詠嘆である。九世紀中頃の歌人小野小町は「経る」と「降る」、「眺め」と「長雨」の優雅な掛け詞に容色の衰えゆく憂さを忘れようとした。散るほうがよい、老いは醜いからと歌った人（そうく法師）もあれば、花を散らす風を怨む人（そせい法師）もいる。

聖書の詩人たちも、あせゆく花の色にさまざまな思いをこめた。「人のよはひは草のごとくその栄はのの花のごとし」(詩篇一〇三・一五)は、それら様々な思いの基調となるものだが、前八世紀の南王国ユダの人、イザヤに耳をかたむけよう。彼もまた、言葉を尽くすことによって思いを尽くそうとして詩人であった。

イザヤは人の栄光を「凋まんとする花のうるはしき飾」(二八・一)にたとえた。その如くサマリヤは彼の存命中に滅びた。イザヤは「わが栄光をほかの者にあたへず」(四二・八)と、花の色のうつるわけを否定的に説き、転じて肯定的に「栄えをエホバにかうぶらせ、その頌美^{ほまれ}をもうもろの島にて語りつげよ」(四二・一二)と歌った。

花のいろはうつりにけりないたづらに
我身世にふるながめせしまに

小野小町

(三二)

ナジル人の誓願^{ちかひ}も知らず黒髪^{くろかみ}の
みだれて櫛^{くし}の木にかかりたり

旧約時代のユダヤ人は、日本人と同じく黒い髪であった。ところが、黒髪を長くたくわえるのは男性であつて、女性ではなかった。士師サムソンや預言者サムエルがその例である。「彼がナジル人として聖別の誓願を立てている間、頭にかみそりを当ててはならない。主のものとして身を聖別している期間が満ちるまで、彼は聖なるものであつて、頭の毛をのばしておかなければならない」が民数記六章五節のナジル人規定である。

もうひとり、黒髪をたくわえた男がいる。彼はナジル人ではなかったし、またナジル人の黒髪の誓いも知らず、むしろ、自らの長き髪を誇った。そして、彼の誇りが彼のいのちとりとなつたのである。

ダビデの愛息アブシャロム(父は平和)は「足の裏から頭の頂まで非の打ちどころ」(サムエル後書一四・二五)のない美男であつた。彼は己が髪のを誇つて父王に叛逆した。そして、髪長きが故に非業の死をとげた。「驃馬^{むま}大なる橡樹^{かしわ}の繁き枝の下を過ぎければアブサロムの頭其椽^{えき}にかかりて彼天地のあひだにあがれり」(一八・九)と黒髪を乱しての死であつた。

長からむ心もしらず黒髪の
みだれてけさは物をこそ思へ

待賢門院堀川

(三三)

年老いてなほ実を結びみどりなせ
ふりゆくものはわが身なりとも

一九九四年二月六日、六十六歳の誕生日を迎えた。年令は人生の区切りであるから、六十歳を還暦、七十歳を古稀と祝う。寿ぐ気持ちが高じて七十七歳を喜寿、八十八歳を米寿、九十歳を卒寿と、日本の祝いは文字遊びを伴って愉快である。つい私も

九十九を白寿となぞるこの国の

六十六歳無二の寿ぎ

と語呂合わせに興じたくなる。

日本人は六十五歳で法的に老人になるのだから、六十六歳はまさに「ふりゆくものはわが身なりけり」である。ましてや古人が、嵐にさそわれた落花の庭を雪景色にな

ぞらえ、わが身に引き合わせて嘆いたのも、短かった平均寿命を考えると、無理からぬことである。

六十六歳の朝、私は六六巻の聖書を開いた。その詩篇六六篇、イザヤ書六六章も印象深かったが、以呂波歌詩篇一九篇の六六節は特に、身はふりゆくとも御言を信じる心は若く、日々聡明と知識を与えられると約束してくれた。この約束を詩篇九二篇一四節は「年老いてなお実をむすび、豊かにうるほひ緑の色みちみちて」とほがらかに歌っている。

花さそふあらしの庭の雪ならで
ふりゆくものはわが身なりけり

入道前太政大臣

(三四)

このときのためどころ砕きたり

ものや思ふと王の間ふまで

旧約聖書はおとこおみなに住む国である。そこで、おみなはおとこに出会い、おとこはおみなに結ばれる。ペルシャ王アハシュエロスことクセルクセスとその妃エス

テルとのシュシヤンの城での出会いは忘れ難い。

ユダヤ人エステルは王妃にと選ばれ、出自を固く隠して宮廷に入る。五年の歳月を経た頃、王はエステルに飽いたのか、ギリシヤ征服計画で忙しかったのか、三十日も妃を召すことがなかった。その頃、宮廷では皆殺し計画が立てられ、全土に命令が伝えられた。王妃に選ばれたのは「このときのため」とはげまされ、エステルはシュシヤンの全ユダヤ人と宮廷の侍女たちの三日の断食祈祷に支えられて王座に近づく。召されないで王の所に行く者は死刑との法令を冒しての決断であった。

エステルの思いが王に伝わったのか。王は手にした笏を差し伸べ「どうしたのか」と問う。これを機に皆殺し計画は未然に防止され、この日から王と王妃は生涯の伴侶となる。

エステルの廟が、古代ペルシヤの冬の都、今はさびれた寒村スーサの南百キロのハマダンに在ると聞く。

しのぶれど色にいでにけりわが恋は
物や思ふと人の問ふまで

平兼盛

(三五)

その庫よりゆふべあさけの風吹けば
いでそよ神を忘れやはする

有馬山も猪名も摂津、今の神戸市にある歌枕で、大式三位は二つの歌枕が「有」イエスと「否」ノウに音が通うのを巧みに用いて、そよ風の流れるようならしめにのせて、千古変わらぬ恋の思いを歌う。

君を愛しているとは口先だけ、もう私を愛していない男から、心変わりがしたのかと疑われ、その通りであると答えようか、それとも、そんなことはないかと答えようか、迷っている女の気持ちが切ない。更に、ささ原がそよ風にそよぐように、私の心もそよと揺れている、そうですよ（いでそよ）、あなたのことを忘れたりするものですか、忘れるわけがないと、軽い皮肉も聞こえてくる。

聖書にも風が吹いている。聖書の風は神の息（創世記一・一）であり、神の使者（詩篇一〇四・四）であり、神の助け（出エジプト記一五・一〇）であり、神の力（詩篇一〇七・一八）である。エレミヤは神が「風をその府庫よりいだす」（十・一三）と歌い、詩篇の詩人はこれを今に歌い（一三五・七）ついでいる。あさなゆうな吹

く天地のはじめの風に、神の力と安きを思う。

ありま山みなの篠原かぜ吹けば
いでそよ人を忘れやはする

大式三位

(三六)

ゆくへもしらぬもの鷲と蛇ふねの路
をとこをみな恋の道かな

由良という歌枕にかかわる地は淡路島にも、和歌山県
由良町にもあるが、好忠の歌の由良は彼の任地であった
丹後、今の宮津市の由良と考えられる。歌は、楫を失つ
た舟がどこに流れて行くか分からぬように、人の恋も、
ゆくすえどうなるかまことにおぼつかないと嘆いている。
ゆらは、いかにもゆらゆら揺れる頼りない小舟にふさわ
しい地名だ。「由良の門を」と歌い出す上三句は、実に見
事な序詞であって、下二句の不安を巧みに表現する。

旧約聖書の箴言も、音の巧みではないが、数字の巧み
を用いて「私にとって不思議なことが三つある。いや、
四つあって、私はそれを知らない」(三〇・一八新改訳)

と語り出す。

天にあるわしの道、
岩の上にある蛇の道、
海の真中にある舟の道、
おとめのへの男の道。

三つと切り出してすぐに四つと言い直す箴言は、知る
ことのできない道を数え尽くすことは不可能と示す。そ
して「姦通する女の道」を五つ目に挙げて、主要な戒め
とする。しかし百人一首の世界には姦通の罪はない。

由良の門を渡る舟人かぢを絶え
ゆくへもしらぬ恋のみちかな

曾禰好忠

(三七)

ネゲブ野の二つの夕の間にぞ
あひあひにける忘れめや汝を

みかの原も泉川も京都府相楽郡加茂町にある。二つの

地名が「何時^{いつ}見川」「三日^{みか}の原」と呼応する。「いつ会ったからとてこんなに恋しいのか」と尋ねる歌に隠して「某月三日に見初めた」と告白し、相手の応答を待っているのである。（『日本名歌集成』学燈社）

相互に相手の様子を尋ねることを相聞（そうもん）というが、聖書にこのような相聞の事例を求めれば、創世記二四章、イサクとリベカの出会いとならう。場所はみかの原ならぬネゲブ野、時は夕暮れであった。

夕暮れと日本語に訳されている時刻はヘブル原語に拠って「二つの夕の間（あはひ）」と訳出すれば、正確であり美しい。日没の前後のひととき、二時間ほどとされている。これは一日の一番美しい時刻であるだけでない。「夕あり朝あり是首の日なり」（創世記一章一節）と、一日は日没をもつて始まると考えた人たちにとって、過越の小羊を屠る（出エジプト記一二章六節 最も神聖な時刻でもあった。イサクがリベカの他に妻妾を持たなかったことがその証拠であろう。兼輔の歌をリベカに歌わせて、イサクに代わって詠んだ相聞の返歌である。

みかの原わきてながるるいづみ川
いつ見きとてか恋しかるらむ

中納言兼輔

（三八）

やすらはで父の誓ひを守りたり
二夜の月を山に見てより

どうしようかと迷う意味の古語「やすらふ」がエフタの娘の心境であった。父エフタ（その名は「彼は開く」の意）が開いた口の誓いが、皮肉にも、娘の胎を永久に閉じることになった。神を棄て自らを生かすか、神に従い自らを捨てるか、やすらいの挙句、エフタの娘は二カ月の猶予を乞い、友と山に入った。

この二カ月の間、イスラエルの娘たちは山で、月が欠け満ち、ふたたび欠け満ちるのを見た。娘等の涙の袖にふたたびの月が映ったことであろう。このふたたびの月を、日本文学の床しい呼び名で「二夜（ふたよ）の月」と取ることもできよう。

八月十五日夜の「こよいの月」九月十三夜の「後の月」とを二夜の月と呼ぶ。後の月が西の空に傾くと、エフタ

の娘は心を決めて山を下りた。そして、誓いのままに処女のままだに火に失せた。士師記一章三八節「山々の上で」と三〇節「二カ月の終わりに」との間には大きな空白がある。聖書釈義学がヘブル文学の粹と称えるこの「空白」を埋めるべく英国の詩人テニソンは七一行の詩を献げた。私もエフタの娘に短歌十八首を献げよう。これはその一首である。

やすらはで寝なましものを小夜ふけて
傾ぶくまでの月を見しかな

赤染衛門

(三九)

ガテの巷ちまたに告げ知らするなペリシテの
娘等あざけらむ名こそをしけれ

評判が落ちる（名が朽ちる）ことを嫌い、名声の傷つくことを残念に思う（名を惜しむ）は人情の常であって、世の東西を問わない。

相模は十一世紀の女流歌人。相模守大江公資と別れてから何人もの宮廷人と恋をした。人の情なさをつらみ、

涙のかわかぬ袖が朽ちてしまうのだけでもたまらないのに、恋が実らず名まで朽ちてしまうのが口惜しいと歌う。激しい女性だったらしい。

聖書でも、名を残さずに死ぬこと、名を傷つけられたまま死んでいくことは恥とされた。サムエル後書一章の「弓の歌」は、琴の人でもあり言ことの人でもあったダビデが、主サウル王とその長男、刎頸かんけいの友（首を切られること、つまり生死を共にするほどの親友）ヨナタンの死を悼んだ歌である。ヘブル詩の中心的技巧、同じ構文の二行を平行させる平行法、しかも、それを二つ重ねた見事な九連の葬送曲である。

此事をガテに告ぐるなかれ
アシケロンの邑まちに伝ふるなかれ
恐らくはペリシテ人の女等喜ばん
恐らくは割札を受けざる者の女等
楽しみ祝はん。

その対句のひとつを一首に詠み込んでみた。

恨みわびほさぬ袖だにあるものを
恋に朽ちなむ名こそをしけれ

相模

(四〇)

オリブの山に退き朝まだき
ふるさと安くあれと祈りぬ

ふるさとは、今では生まれ故郷を指すが、本来は古里、古くなつて荒れた場所、特に、昔は都があつたが今は衰えている地を指した。

吉野山を詠んだ歌は三百八十一首あるが、歌書よりも軍書に悲し吉野山（支考）と詠まれているように、吉野山はまた歴史にもあわれをとどめる山であつた。その吉野山に七、八世紀の頃歴代天皇の離宮があつたため、雅経はこの山を「ふるさと」と呼ぶ。

雅経の歌はこの小さな山の歴史的な大きさを、そして、日本人にとつてのふるさとの意味とを、余韻をただよわせて歌いあげる。

日本史ならぬ世界史の古里はエルサレムであると言えよう。五百年間イスラエル王国の都であつたこの町は、

シオンなど六十の異名を持ち、旧約聖書では六百回も言及されている。

この町が最も美しいのは、小夜更けならぬ朝まだき、町の東にある標高八百米のオリブ山からであるという。ここはイエスが夜になると宿つた（ルカ伝二一・三七）山、そして、雛をはぐくむ牝鶏の翼（マタイ伝二三・三七）をもつて、朝まだき、旧約の詩人のごとく（詩篇一二二・六）平安を祈つた山である。

みよしの山の秋かぜ小夜ふけて
ふるさと寒く衣うつなり

参議雅経

(四一)

主が与へ主が取り給ふと讃めしより
世を憂しと見る罪知らざりき

藤原清輔（一一〇四―一一七七）の晩年は保元（一一五六）平治（一一五九）の乱があり、不穩の時代だった。個人的にも不運不幸が重なり、失意落胆の生涯だったという。「つらかった昔も今は恋しいのだから、今がなつか

しくなる日もあろう、長生きしよう」と詠んだ三十路の諦観を七十三歳の死まで保ちつづけたのだろうか。

ヨブが様々な苦難に出会い、「エホバ与へエホバ取り給ふなりエホバの御名は讀むべきかな」(一・二二)の諦観を口にしたとき、彼には成人した息子七人娘三人があつたというから六十歳位だったろうか。この信仰を得てもなお、不幸がヨブを訪れる。身体は病に弱り、信仰は妻に嘲られ、友人たちはヨブの不信を責めた。

そうした中でヨブは、妻を失い三人娘の二人を失った七十五歳のマーク・トウエインの如く、「与えられて取られただけだ。まるで悪質ないたずらだ」と神を呪うこともできたろう。だがヨブの信仰は変わらなかった。神はヨブに息子七人娘三人を再び与えた。ヨブは百四十歳「年老い日満ちて死にたりき」と聖書は記している。

ながらへばまたこの頃やしのばれむ

憂しと見し世ぞいまは恋しき

藤原清輔朝臣

(四二)

見せばやなシュシャンの城の
をとめらがぬれにぞぬれし袖の涙を

名高い松島の雄島で来る日も来る日も海にくぐる女たちの袖はしとどにぬれているが、色まで変わることはない。しかし、私の袖は日毎夜毎の涙に色あせてしまったと、袖を見せながら不実な男をなじる歌である。

ペルシャ王アハシユエロスの王妃にえらばれたエステルは、ユダヤ人であったが、その出自を固く隠して王宮に入った。喜びの王は「エステルは」を開いて諸候家臣らをもてなし、諸州に恩赦減税を通達した。

ギリシャ遠征を思い立った王はハマンを総理大臣に登用した。ハマンはユダヤ人に宿怨を抱くアマレク人だったが、国論統一と戦費捻出のためユダヤ民族皆殺しを計画した。民族の危機にエステルは、自分がユダヤ人であることが分かってしまう危険を冒して、王に直訴しようとした。

だが、政務に忙しい王は後宮を忘れ、三十日もエステルを寝所に召していなかった。侍女たちと都のユダヤ人の三日の断食に押し出されたエステルは、王の前でこの

歌をうたう。「そのとき神は王の心を変えて柔和ならしめ」たと、旧約聖書外典エステル記残篇は記している。

見せばやな雄鳥のあまの袖だにも
ぬれにぞぬれし色はかはらず

殷富門院大輔

(四三)

アロンのつえ川面を打てばナイルことごと
からくれなゐに水くくるとは

竜田川に散る紅葉の美しさ。業平はこれをくくり染め（布を糸でくくって部分的に染め残しをつくり、さまざま模様を染め出す技法）の妙にたとえた。そして「前代未聞！」と驚きの声をあげた。

何百年にも及ぶ異国での苦役の後、約束の地を目指してエジプトを脱出しようとしたイスラエルに、エジプトの王バロは自由を与えようとはしなかった。神はモーセとアロンを通して、エジプト全土に九つの災い、河水が血となる害、蛙の害、蚤の害、蚊の害、疫病、腫物、雹の害、蝗の害、暗黒をもたらした。そして、それらをし

めくくる第十の災い、長子の死をきっかけにエジプト脱出が始まったと出エジプト記七章は記している。

モーセとアロンとミリアムは主が命じられたとおりに行なった。彼はバロとその家臣の目の前で杖を上げ、ナイルの水を打った。すると、ナイルの水はことごとく血になった。

エジプトの歴史上前代未聞の出来事に、バロと家臣は「ちはやぶる神代もきかず」と叫んだことであろう。

ちはやぶる神代もきかず竜田川
からくれなゐに水くくるとは

在原業平朝臣

(四四)

エバルゲリジムみなに響かふ祝福の
声ぞつもりて国は建ちそむ

日本文学はこの世の中を「をとこをみなの住むくに」と取る。「世の中」という句そのものが男女の中をさす。陽成院は筑波の二峯を男体山女体山、やがて桜川に合流する谷川を男女の川と呼び、恋の心は山のように繁く、

落ちる川瀬の音のように激しく、また、つもるふちのように深いと歌う。

聖書は世の中を、被造物たる人間が神に従うときには祝福を、従わぬときには呪詛をといて契約関係を取る。祝福と呪詛とは、神の御旨という盾の両面なのである。祝と呪と、二つの漢字を並べてその相似に驚かぬ者はあるまい。「兄」は人と口とからなる。つまり、長兄は一家や一族のスポークスマンなのである。聖書で長兄の役を果たす祭司が口を開くとき、それが祝福となり呪詛となる。

出エジプトを果たし、約束の地の征服にとりかかったイスラエルは、シユケムの谷に集まる。ヨシユアの命を受けた祭司が申命記二十八章を朗読する。神の律法を建国の基礎に置き、繁栄の條件とする国家が、いま、厳かに始まろうとする。東はヨルダン川、西は地中海を見遙かす山腹に集まったイスラエルのアーメンが、エバルとゲリジムの峯々に繁く、激しく、深く、響きあう。

筑波嶺のみねより落つるみなのか
こひぞつもりて淵となりつる

陽成院

(四五)

風をいたみ沈むばかりをアドリアの
巖の上に主は置き給ふ

はげしい風に立つ波は岩に碎けるが、岩は動じない。そのように、狂おしい男の恋とつれない女の心とが対照されている。「おのれのみくだけで」の詞のたくみが、歌の声調と相まって、広く愛誦されている。

ユーラクロンという東北東の激しい風が地中海（使徒行伝二七・一四）に吹いている。クレタ島から吹きおろす風である。当時の航路は島の南側にあったという。風下を行く帆船にとって危険きわまりない。

パウロの伝道旅行、第三回にして最後の船旅が始まった。船はキプロスを出発し、クレタ島のフェニックス港に近づいた。おだやかな南風が突然ユーラクロンに変わり、船は流された。そして、パウロとその一行はクレタ島の南西にあるカウダの島陰に避難した。船員は恐れた

が、パウロは「^{おそ}懼るな」と神の使の声をきく。その如く、カウダ島から千^{キロ}籽^{メートル}も西、シシリア島の南のマルタ島まで、二週間、アドリアの海をただようこの船には主の守りがあったのだ。まさに「エホバは患難の日に巖のうへに我をたかく置き給ふ」(詩篇二七・五)のである。海を支配する神をうたった讚美歌 *Melita* がある。メリタはマルタの本名である。

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみ
くだけて物を思ふころかな

源重之

(四六)

すくはれし後のころにくらぶれば
昔は神をおそれざりけり

“きぬぎぬ”という古い日本語がある。書けば“衣ぎぬ”となろうか。「男女が共寝をして二人の衣を重ねてかけて寝たが、翌朝別れる時、それぞれ自分の衣をとって身につけ」(日本国語大辞典) ことから、衣が共寝と別れをあらわす。“後朝”とも書き共寝の翌朝の別れを示

し、日本の詩歌の主題のひとつとなっている。

敦忠の歌は、今風に言えば、かつらやフィットネスクラブの広告によく見かける *before* と *after*、つまり使用前(事前)と対比させて使用後(事後)を際立たせているのである。「あひ見る」前の恋心はつらい。しかし「あひ見て」の後の恋心はもつとつらい。恋心の切ない機微を歌ったこの歌は今も広く愛誦されている。

聖書も、いわば、救い主イエス・キリストを知る *before* と *after* の書である。聖書を知る前の私は、日本のな天神地祇への畏敬の念を持っていた。だから、聖書を開いた時「エホバを畏るるは知識の本なり」(箴言一・七)に心からうなづいた。しかし、救い主なる神を信じた後の私の心の畏れは、「昔は神を」と私に嘆じさせて然るべきほど、深いものであった。

あひ見ての後のころにくらぶれば
昔は物をおもはざりけり

樫中納言敦忠

(四七)

もてなしに心をちぢに砕くよりは
汝が身ひとつの主に聞き入れよ

秋の悲哀感を歌うこの歌は「わが身ひとつの秋」という美事な発想、そしてちぢ（千）とひとつ（二）を対比する技巧によって真情を伝える。技巧とは表面の飾り、小手先のわざと誤解されているが、この歌は技巧なくば真情なしと言っているようだ。

千（ち）にひとつのつと同じようにち・という接尾語をつけち・とし、それを連濁するとちぢとなる。数千を意味するが、数千と一の対比、manyとonly oneの対比を聖書も強調技巧のひとつとして用いている。その例として旧約聖書からは出エジプト記二十章「我の外何物をも神とすべからず」と定めている十戒の第一戒が挙げられる。この戒めを守る者には、めぐみが「千代にいたる」とちぢとひとつが立場を逆転する。

新約聖書からはルカ十章、マリヤとマルタの対比が、例として挙げられよう。「もてなしのこと多くして心いりみだれ」るマルタのちぢと、「無くてはならぬもの」ただひとつをえらび、主の言葉に聞き入るマリヤのひとつと

が対比されている。マリヤにとってイエスは「わが身ひとつの」主であったと言えよう。

月みればちぢに物こそかなしけれ
わが身ひとつの秋にはあらねど

大江千里

(四八)

花はしばみ草は枯れども預言者の
心は離れじ神のことばを

冬が来ると、そうでなくとも淋しい山里がとりわけ淋しくなる。このことに気付いた宗子の歌の巧みは「かる」にある。枯ると書けば草が枯れることであり、また離ると書けば、人目や人の心が離れ去ることを意味する。宗子が山里の冬を描いた「人目も離れ草も枯れる」掛言葉の巧みを、巧みに逆転させたのが

秋萩をいろどる風は吹きぬとも
心はかれじ草葉ならねば

の業平（後選集秋上）である。秋萩を色づかせる秋風は吹いても、私の心はあなたを離れません、心は枯れる草の葉ではないのですからと誓う巧みの歌である。

聖書の草も枯れる。そして詩人にして預言者なるイザヤは、ヘブル詩の巧みである繰り返しと対句とを用いて、更に「されど」と逆転の接続詞によって、枯れる草の彼方に枯れぬ御言を見、御言を離れぬ心を歌う。まさに神の言を預かる者にふさわしい歌といえよう。

草は枯れ花はしほむ

エホバの息そのうへに吹きければなり

草は枯れ花はしほむ

然どわれらの神のことばは永遠にたたん

（イザヤ書四〇・七、八）

山里は冬ぞさびしさまさりける

人目も草もかれぬとおもへば

源宗于朝臣

（四九）

荷を守り箱を衛りし六人の
名こそ流れてなほきこえけれ

日本的風景のひとつに名滝がある。華嚴の滝、白糸の滝、養老の滝と数多い。公任は京都大覚寺の滝を讃め、水の音は絶えて久しいが、名滝のはまれば今も世に聞こえていると詠み、自分も滝にあやかっつて、歌の歴史に名を残したいと願っているのである。

旧約聖書の人々も同様であった。たとえばルツ記を開こう。一幕四場の芝居の主役八人のうち七人、エリメレクとナオミ、マフロンとロルパ、キルヨンとルツ、そしてボアズの七人は名を残しているが、もうひとりの主役は「買戻しの権利のある親類の者」と記されているにすぎない。彼が果たす役の大きさを考えると、不思議な取り扱いである。

これと反対に、果たす役は小さいけれど、どんな些事も主の御用と忠実に果たしている人々は、その名を聖書の青史に留めている。エルサレムに都を定めたダビデは神の箱を都に搬入する。その喜びの描写（歴代志略上一五・一六―二四）に、荷物係ケナヌヤ、箱を守る門衛オ

ベデ・エドム、エイエル、ベレク、エルカナ、エヒヤたち「小事に忠なる者」(ルカ伝一六・一〇)が名を残している。

滝の音は絶えて久しくなりぬれど
名こそ流れてなほきこえけれ

大納言公任

(五〇)

信ずてふわが名はまだき立ちにけり
水に下りてバプテスマ受く

恋をあらわす歌語は多い。過ぎし恋、思いそめた初恋、成る恋、失う恋、忍ぶ恋、見ぬ恋、待つ恋、老いらくの恋からひとめばれ、ミスコスモスに至るまで、恋愛心情表現は多様化している。こうして恋の歌が和歌の主流をなすに至った。日本文学の主調音は、おとこおみなの仲にあると言えよう。

キリスト教文学の主流は信仰であり、人と神との仲である。エチオピア女王カンダケの財産管理役の高官が、遠くエルサレムまで神を礼拝しに行った。彼の信じたい

気持ちたちがそれほど深いのを知った御霊は、エルサレム教会の七人の執事のひとり、後にアフリカ宣教の大役を果たすピリポに働きかけた。御霊に導かれたピリポは、ガザの荒野をエジプトに向かう高官の馬車に乗り、聖書を説いた。イザヤ書の「屠殺場に引かれて行った羊」(五三・七)がイエスについての預言であることを高官に説いた。彼はためらうことなく、水に入り、バプテスマを受けた(使徒行伝八・三八)のである。エジプトの高官にして大和の歌ごころありせば、私の求道心が早くも(まだき)分かつてもらえたのかと、謙遜に、御霊とピリポへの感謝を表現したのであらう。

恋ずてふわが名はまだき立ちにけり
人知れずこそ思ひそめしか

壬生忠見